新聞　（第3種郵便物認可）

# 読売俳壇

## 矢島　渚男　選

降る雪や昔ばなしをするやうに　青森市　小山内豊彦

【評】降る雪の中で幼い時から繰り返し聞いた話を思い出す。昔噺ではなく家族の思い出かも知れない。優しくときに激しく、雪は降り続く。単純で美しい句だ。

牛の声背にふるさとの初湯かな　小金井市　高橋　広子

【評】久しぶりの正月帰省でくつろいでいる。風呂に入っていると、背中の方からモーと牛の鳴き声がする。懐かしい。よきふるさと。

子を行かせ犬も通して雪箒　京都市　根来美知代

【評】久しぶりの雪で家の前の通りを掃いている。子供が通る。気をつけてねと声をかける。続いて犬も通って行く。「雪箒」が簡潔でいい。

この星の平和を加へ初詣　岡山市　宮下　哲朗

ふるさとや母の手縫いのちゃんちゃんこ　草加市　伊藤　一男

風花や仏光寺通蕪村住みし　京都市　吉田　基子

初詣つぶすな様の名を知らず　宝塚市　広田　祝世

妹の手を借りて入る初湯かな　横浜市　奥沢　和子

夜更けまだ底見えてをり慈善鍋　町田市　谷川　治

決断は飛び立つ時よ冬鷗　志摩市　岡山　花野

## 宇多喜代子　選

雪山のさらに後ろに雪の嶺　栃木県　あらゐひとし

【評】作者のいるのは雪山の見えるところ。見ている山の後ろにさらに高い雪山がある。眼前具象の良さのある句だ。

早朝の音なき音のぼたん雪　さいたま市　加治美智子

【評】大きな雪片で無音で降るのがぼたん雪。雪は音を立てずに降るが、雪が降っているという気配を察することはできる。ぼたん雪は春の季語である。

寒牡丹大事に大事に育てをり　秩父市　中島由美子

【評】「大事に」を二度かさねて、いかに大事に育てているかを表現している。藁で囲い、笠で覆い、雨風や冷気から守っている。

蹠きていちばん寒い日となりし　宇都宮市　福田　澄子

古里の冬田想えば父がいる　さいたま市　岡村　行雄

一息に呑んで重たき寒の水　武蔵野市　渡辺　一甫

巻き癖をまずは正して初暦　長野市　池田　典隆

たわいない会話途切れず三ヶ日　東海市　斉藤　浩美

御堂筋光かがやく冬の雨　大阪市　塚本　和也

かの海女がかく着ぶくれてをりにけり　千葉市　中村　重雄

## 正木ゆう子　選

ピアス光る革ジャンもこの夜景かな　横浜市　高橋　敬子

【評】ピアスは光る金属で、革ジャンは金具の付いたハードなものか。そう思わせるのは「夜景」のキラキラ感。イルミネーションまで想像されて、複雑な文脈が個性的な句。

ストックの雪を払いて汁粉かな　東京都　野上　卓

【評】お汁粉を食べる設定は色々あるが、これはかなり美味しそうな設定だ。スキーで滑り下りてきて、鍋から装った熱々をこれから戴く。

煤逃げの息子と孫を追ひ返す　さぬき市　塚原　賢治

【評】家の手伝いもせず実家に遊びに来た二人を、帰って掃除でもしろと追い返したのだろう。孫も男の子で、三代の男が揃った面白さと解釈。

小雨打つ成人の日の菜っ葉服　さいたま市　関根　道豊

朱鷺塒しばしざわめく雪起し　東京都　朝田　黒冬

魚雪るる市場のカーブ寒鴉　松戸市　稲葉　豊美

谷津奥に車入り行く四日かな　旭　市　斉藤　功

餅屋から肚に響ける音続く　三次市　山本　美和

お歯黒壺これも花入れ冬椿　水戸市　大野太加し

寒月や影さへ重き大手門　大分市　後藤　利夫

## 小澤　實　選

タイムカプセル掘るや成人式果てて　渋川市　星野　芳美

【評】幼い頃に埋めたタイムカプセルを、その頃約束したとおり成人式終了後に掘り出している。さて、期待したようなものが出てくるかどうか。晴着は着替えていましょう。

地に堕ちてビンと震へる奴凧　小山市　松本　喜雄

【評】読みおろしてくると、下五に至って、しっかりと像を結ぶという句。「ビンと震へる」に竹と紙でできた奴凧の存在を実感する。

春着の子たのむ大盛ナポリタン　伊勢市　藤田ゆきまち

【評】新年おろした晴着で外出した子が、大盛ナポリタンを頼んだ。春着を汚しそうで心配だが、心の底からおせち料理に飽きているようだ。

墓石の上に降り立つ寒鴉　神戸市　倉本　勉

牡蠣フライ五個の定食二個追加　堺　市　土居　健悟

引き返さう落葉だんだん深くなる　甲府市　村田　一広

釜揚げの氷魚の白し比良が峰も　枚方市　秋岡　実

セーターの弛みだしたる袖と首　宇都宮市　津布久　勇

嫁が君亀の尾つぽを食ひにけり　西東京市　永井　康信

この盆梅やるよでえびにしてくんな　茅ヶ崎市　古田　哲弥

## 枝しおり　折

友岡子郷句集『貝風鈴』　昨年亡くなった蛇笏賞俳人の遺句集。飯田龍太に「木洩れ日のよう」と評された句風は晩年もなおしなやか。〈わが一生ヒヤシンスまた咲きそめぬ〉（本阿弥書店、2970円）

『辻桃子の津軽歳時記』　青森県在住の「童子」主宰が、安部元気副主宰と北国の暮らしが息づく季題を集めた。〈雪解水曲がりきれずにあふれけり〉（文学の森、2200円）

大森静佳歌集『ヘクタール』　第3歌集。「塔」所属。秘めた情熱は一途でほの暗い。源氏物語へのオマージュなど。〈わたしはもう夕焼けだから、きみの血が世界へ流れでたって平気〉（文芸春秋、2310円）

大西淳子歌集『火の記憶』　第3歌集。「コスモス」所属。社会への違和感や怒りが硬質な詩情に結晶する。〈涼やかにそうめん入るるみずいろのガラス食器は火の記憶持つ〉（青磁社、2530円）

題字デザイン・イラスト　福田美蘭